

「われなり恐れるな」

詩編46：1-11・ルカ8：22-25

(1)

8章22節には、主イエスが「さあ湖の向こう岸に渡ろう」と弟子たちを促した印象深い言葉で始まります。その言葉に促された弟子たちは舟を出しました。出して、しばらくすると、舟の後部に横たわっていた主イエスは、「ぐっぐっ」の眠ってしまったというのです。その時です、湖上に突風が吹き、小舟は水をかぶりはじめ、身の危険を感じた弟子たちは、「あなたに向かってこう岸に渡ろうとおっしゃるから舟を出したのです、先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです」と悲鳴を挙げました。横浜の教会における牧師の務めは、自分からいうのもなんですが、かなりの激務でした。「24時間働けますか」という「マーシャルの全盛の時代です。突風が吹こうが眠り込んでいたイエスの姿から、牧師はいくら激務であらうと、一日が終われば、すべてを委ねて眠るこの賜物がなければ、務まらない務めであると思われました。

イスラエルの最北部に「ヘルモン山」(2814^足)から吹き下ろす強風が、ガリラヤ湖面を吹きつけ、突風を起すことはよく知られていました。このガリラヤ湖特有の強風が吹いた時、弟子たちはあわてふためいたところの、そのあわてふためいたことをおぼろしく話して、「1-2弟子の内」に入

「ロ・ア・シヤ」の「セバタイの子ヤ」の「ハネ」の四人は、ベッサイダの地元の漁師です。ガリラヤ湖の地形とか、四季折々の風向きの変化、朝夕の湖面の流れ具合などは、幼少の頃からすべて熟知していたはずですね。いわばガリラヤ湖を知りつくしていた地元の人達だ。突然の強風に出会って、あわてふためいたのです。ところが、陸(おか)育ちの主イエスが、風が荒れ狂う中で、舟の後ろに身を横たえて、「眠り込んでいた」というのですから、何ともおかしな話です。

俗に、「学者バカ」といいます。多くは現場で判断を間違えます。10年前、福島県の原子力発電所が爆発して、東日本全体が危険にさらされました。その時、原子力の専門家の多くが、今回の事故は、「想定外」であったと言いました。ガリラヤ湖という現場で強風に出会った弟子たちも、これもまた想定外であったと言ったのでしょうか。

聖歌「人生の海の風に」には、「もまれきわが身も」との歌詞があります。人生という実践の場では、想定外なことがしばしば、いや、度々起きます。

ところで、吹き荒れる突風の中で、弟子たちがあわてふためいている様子を眺められた主イエスは起き上がった。「あなたがたの信仰は何にあるのか」(8：25)と、たごなめられ、風と波とをこらして静まれば、黙れ「(93：44)」「(93：43)」「(93：42)」のついで

(2)

先ほど共に読みました詩編4の編「は、神はわれらの避け所また力である。怒める時のい近き助けである。」「のゆえに、たとひ地は変り、山は海の真中に移ることも、われらには恐れない」「この節は「詩」の10節には「静まって、わたしこそ神であることを知れ。わたしはともともうの国民のうちにあがめられ、全地にあがめられる」とあります。

「たとひ地は変り、山は海の真中に移ることも・・・」「恐れない」「これほど揺るがない神を信頼するとは、あこがれに過ぎないのではしょうか。」「静まれ」「すべてをいしょうか。」「とは何をよめるのしょうか。」「とは心配するのをいしょうか。」「静まれ」「すべてをいしょうか。」「静まれ」。身の危険が迫るといしょうか。」「静まれ」。身の危険が迫るといしょうか。

「水はながれぬ」(4:4)、「もももももももも」(4:6)とあります。これは古代の人の耳にとどいた大音響であり、現代のわたしたちには無縁とさえ思われてしょうか。しかし、以前にもまして、今日は人の声のみしげき時代ではないうしょうか。周辺の絶え間ない雑音と騒音の中で、いっしょに自分自身を見失う危うひがあります。もちろん、神の御前に静まることうごとがなければ、耳元の「ウウウウウウウウウウ」の騒音を挙げて吹飛ばす神はとうとう強風に吹き飛ばされて危険は何時も身近に迫ってきます。

すれば、主なる神が、「静まれ。」「すべてをよめ」と命じられていゝこと「耳をかきねはなりません。

50数年も前になりました。神学校を卒業する間際に、寄せ書きをすることになりました。最後に、舟喜順一校長が色紙の真ん中に墨汁で黒々と書いたのは、「われなり恐れるな」の御言でした。何故その御言を書かれたのか、わたしには、その時、その真意がわかりませんでした。しかし、考えてみれば、未熟な伝道者を、今まさに、世の荒海に送り出すとしていた時です。

主イエスは、12弟子を世に送り出すにあたり、「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものです」「(マタイ10:16)と言われました。神はいないという不信仰の強風が吹き荒れている現場に送り出されるのです。心中深く恐れをいだいていたわたしたちを励ます御言として、は、「われなり恐れるな」の御言は、まさしく意に叶った御言として、わたしの脳裏にしっかりとときざみ込まれました。

(3)

皆みなは、「ジョン・ウエスレー」をご存知でしょうか。彼は牧師の家庭に、15番目の子供として生まれました。信仰深い母親に育てられた彼は、やがて大学を卒業してイングリッシュ国教会の司祭となりました。彼は「完全なきため」の神学を信じ、それこそ敬虔なキリスト者でした。しかし、どこか、自分のキ

リスト教信仰に自信がなかったといえます。そうしたとき、宣教地がアメリカと決まり、船に乗り米国へ向かいます。

ところが、大西洋の洋上で、激しい嵐に出会い、船は木の葉のように揺れ、マストはすたすたに引き裂かれ、甲板に水が流れ込み、船もろとも大海にのみ込まれそうになった時、悲鳴が船内に響がりました。

ところが・・・です、乗り合わせていた者の中に、モラビア派の二団がいました。その日は、「主の日」でありましたので、強風のなかにもかかわらず、礼拝を始め、賛美を歌い始めたというのです。落ち着いて礼拝をしているその姿に、ウエスレーはひびく驚き、後に「モラビア派の指導者に尋ねております。」怖くはなかったのですか。「すると、「少しも」というではありませんか。」婦人や子供たちがいましたね」と聞けば、モラビア派の指導者は穏やかに、「いいえ、私たちの婦人や子供たちは、死ぬことを恐れてはいません」。激しい嵐の中で、微塵も不安・動揺をみせない彼らの姿に、信仰者ウエスレーは激しく揺さぶられます。

ウエスレーは、その後、モラヴィア派の指導者（面会し、話し合われた時）が彼の日記に記されています。モラヴィア派の指導者は、「あなたは救いの確信を持っているか」と尋ねられました。オックスフォード出身の秀才な神学者先生です。そう尋ねられ、どう返答したものかが分からなかったのです。その

様子を察した指導者はさらに尋ねました。「あなたはイエス・キリストを知っていますか」「勿論、イエス・キリストが世界の救い主であることを知っています」とためらいながらも答えたのです。

すると、彼はさらに続けて、「そうですか。しかし、キリストがあなたを救って下さったことを知っていますか」と問われた時、「キリストが罪と滅びからわたしを救うために死んでくださったことを知っています」と何とか答えると、それに続いて、さらに、「君は自身身がわかっていますか」と問われて、「はい、もちろんです」と答えたのです。しかしそう答えたものの、次第に、いかにむなしい響きであるかと気づいて、恐れを感じたというのです。

それまで、自分はキリスト者であると、確信し、自認してきました。しかし、洋上で嵐と出会った現場において、自分の信仰者としての姿に疑い始め、失意の内にイギリスに帰りました。しかし、後にこのことが転機となり、ウエスレーは、真の信仰に生きることに見定め、後に、メソジスト派の指導者として、多くの魂を主に導きました。

現代社会を取り巻く周辺には、相も変わらず、ブユウブユウ・ウウウウと騒りを挙げて不信仰という嵐が吹き荒れています。

「ジョン・ハンヤン」という伝道者が、ロンドン（の獄中で書いたのが「天路歷程」です。そのなかに、主人公のクリスチャンさんが「死

の影の谷」を通過する時、彼の背後から、あらゆる限りの乱暴な言葉と激烈な神を汚す言葉が囁かれたのです。しかも、それが前からではなくて、背後からささやかれたので、それが誰であるかが分りません。しかも、その神を汚す数々の暴言が、あたかも、自分の本心から出たものと錯覚してしまつたのです。

「わが喜び、わが望み、わがいのちの主よ」「讚美歌527の一番」とまで歌われてきた主イエスを、こともあろうに、あらゆる限りの口汚い言葉を口から出したことが、ひどく彼を悩ませます。しかし、その時、バンヤンは、その声を、いち早く、サタンの囁きであると見抜きます。バンヤンは、霊的感度が鋭かったのです。しかも、サタンは背後から囁くと理解したのです。

時に、わたしたちは、何ともぶがいない信仰者であることを、たびたび反省してきました。しかし、そうした良心的な反省をして、自身を鋭く見つめることが危険なことであり、そのことを感じてこなかった信仰者は一人もいないはずなのです。

キリスト教と縁もゆかりもない家庭に育った若い女性が、キリスト者として一生を送りたいと願っていました。家族の反対によつて、自分の信念を曲げてしまったというケアーがありました。学生時代に信仰を持った青年が、就職した会社の経営優先方針につきまとい、世の習わしに従い、行き詰ってしまつたという話を聞きました。

ここで、もう一度、ルカ福音書に戻ります。

弟子たちは、舟のともひに寝ていた主イエスを揺り起します。「先生、先生、わたしたちは死にそつです」「マル」福音書には、「先生、わたしたちもが溺れ死んでも、おかまいにならないのですか」と呼びました。

主イエスは起き上がり、風と波とをしかりつけます。すると、風も波も治まり、なごになりました。それから、主イエスは弟子たちに向き直り、「あなたがたの信仰はどこにあるのです」と弟子たちをいさめたのです。

すると、弟子たちは「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこのお方はどういふお方なのだろうか」（ルカ8：24-26）と恐れたといふのです。

「われなり恐れるな」と言われて、はじめて恐れから解放されました。

悪性コロナの影響から、会堂に集まることをやめて、ネット配信で礼拝している教会が都会では多くなったと聞きます。教会は、あてもない、こうでもない、試行錯誤しています。それで良くなると思えません。

わたしたちは、礼拝が終われば、祝祷と共に人生の海の嵐に送り出されます。祝祷とは、礼拝の終わりの合図ではありません。

ラテン語で「エテ・ミサ・エスター」といわれてきました。礼拝が終わると同時に、世に送り出される、いえ、派遣されるといふ意味です。「とこしじ意味です。礼拝において、あなたは、疑ひつひなまひつひ

